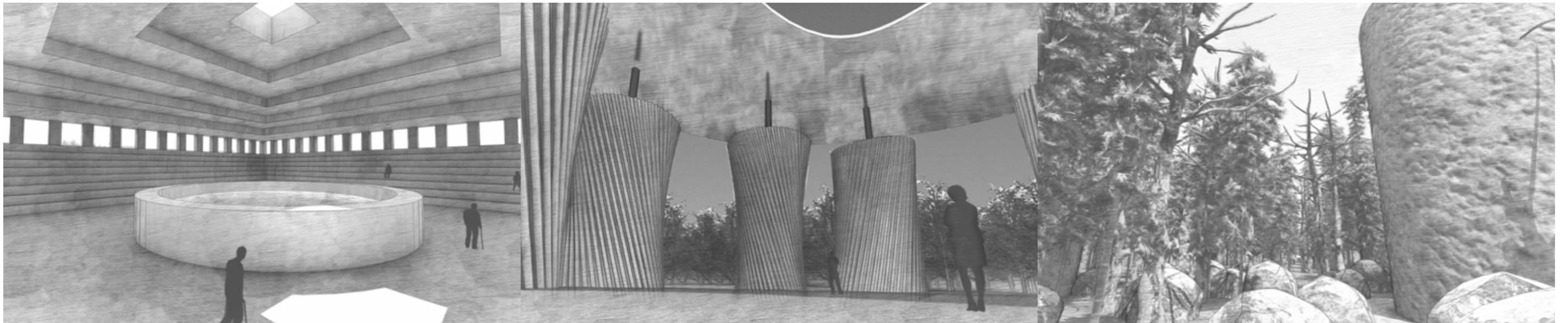


フクシマ第一原発 2121

原発事故を受けた浜通り地域。東日本大震災から10年たった今もなお復興の途上にある。
伝統や風土の豊かなこの土地は、3.11以降、原子力という人智を超えた巨大なシステムによって脅かされた。
数百年先まで続くこの問題は、未来世代に正しく受け継がれるのだろうか。
事故について知らない未来世代と災害を経験した私たちの分断を繋ぎ止めるために何ができるだろうか。
本設計では、2031年、2071年、2121年の福島第一原発跡地の設計を予測する。



2011年3月11日に発生した津波が、福島県浜通り地域を襲った。
福島第一原発ではディーゼル発電機が浸水し、全電源交流を喪失。
冷却機能を失った格納容器でメルトダウンが発生。水素爆発による原子炉
建屋の破損、これによって放射性物質が大気中に放出された。
チェルノブイリ原子力発電所以来、最も深刻な原子力事故が発生した。



2022年現在も周辺地域は立ち入りが禁止されており、ガ
レージで封鎖されたその先は、3.11以降、時が止まっている。
復興に向けて確かに歩を進めているがまだまだ復興に向けて
は道半ばである。
東京電力では、廃炉を進めていく上で、中長期ロードマップ
を定めた。
3,40年で廃炉作業が完了することを目標としているが、未
確定要素も多く、50年後、100年後になる可能性も否めない。

原発事故がもたらしたもの

原子力という巨大なシステムが牙を剥いた。
福島を愛した人、生命につながる作物を作った人、土地
の恵みを大切に人を引き剥がし追放した。
10年たった今でも続いている。私たちはそれを忘れては
ならない。



明治三陸地震の通達

明治三陸地震の後に文部省に出された通達にはこのように
書かれていた。

「基本的には逃げること・・・まちは海を向くこと」
私たちは自然と生きている。自然に向き合いながら暮ら
しを営むべきだということは過去から現在まで変わらない。



なぜ事故は起きたのか

事故は、全電源交流を喪失し、原子炉を冷却する機能を失ったために起こった。
予備電源のディーゼル発電機は地下に埋め込まれていた。設計当時は10m 越えの津波を想定
されていなかった。
自然から目を逸らし、起こるべくして起こった災害なのかもしれない。

福島から何を学ぶか

私たちは自然と共に生きている。

自然に目を逸らしてはならない。

我々は後世にこの記憶を語り継ぎ、同じ過ちを繰り返さないようにしなければならない。

課題

しかし、事故の記憶を語る上でいくつかの問題点が挙げられる。

- ①放射線問題によって、記憶を語る遺構を残すことが難しい。
- ②廃炉作業が長期間にわたるため、再利用ができる頃には事故を経験したものがなくなる。

問い

事故の記憶は未来世代に正しく受け継がれるのだろうか
風化を免れないのではないか
私たちにできることは何だろうか

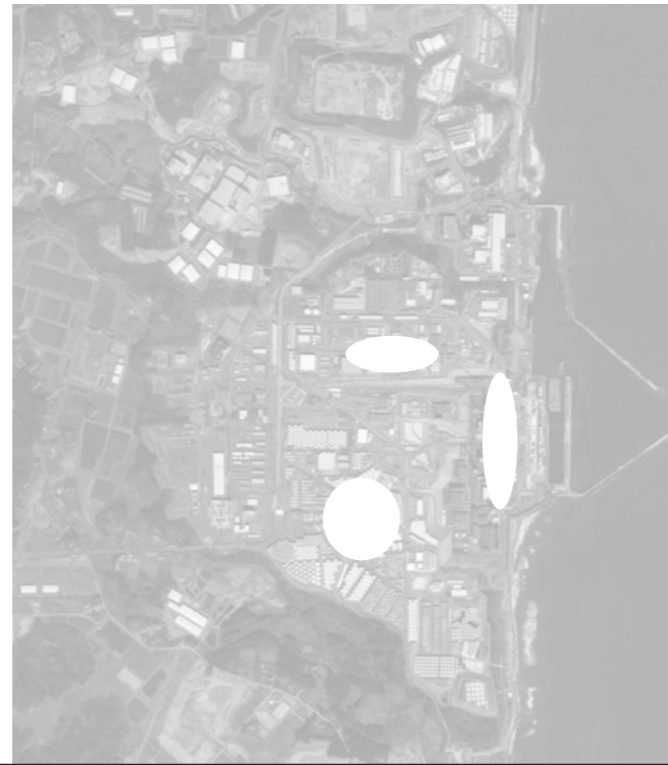


2021

当時の事故をできるだけ語り続けなければならない。

私はこの記憶を語るために、廃炉後も記憶が残る建築のプランを提案する。はじめに原発遺構を選定し、何らかの形で残すことを考えた。

1. 原子炉建屋
2. 処理水タンク
3. 森林が伐採されたエリア



2031

廃炉作業は引き続き行われているが、制度が整い、構内では一般客を立ち入りが可能になった。事故についてより多くの人に知らせるために、一般向けにダークツーリズムが始まる。

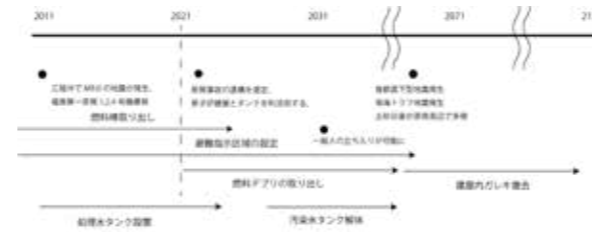
放射線量が十分に下がっている処理水タンク跡地をダークツーリズムのための設計対象とする。

原子炉建屋は廃炉後の絵姿を示せる状況にはない。

具体的な提案は 2051 以降とした。



10 年後、50 年後、100 年後と段階的に設計する。



2071

原発事故について話題に出ることは少なくなった。世代間の分断はすでに生じている。

災害は忘れた頃にやってくる。この数年で、南海トラフ地震、首都直下型地震が発生する。

さらに、原発周辺の山林は管理がされなくなり、山が死んでしまった。原発周辺では土砂災害が多発する。

この頃から自然との向き合い方が問われるようになる。

瓦礫の撤去作業が完了した原子炉建屋は原発遺構としての残し方が検討された。



2121

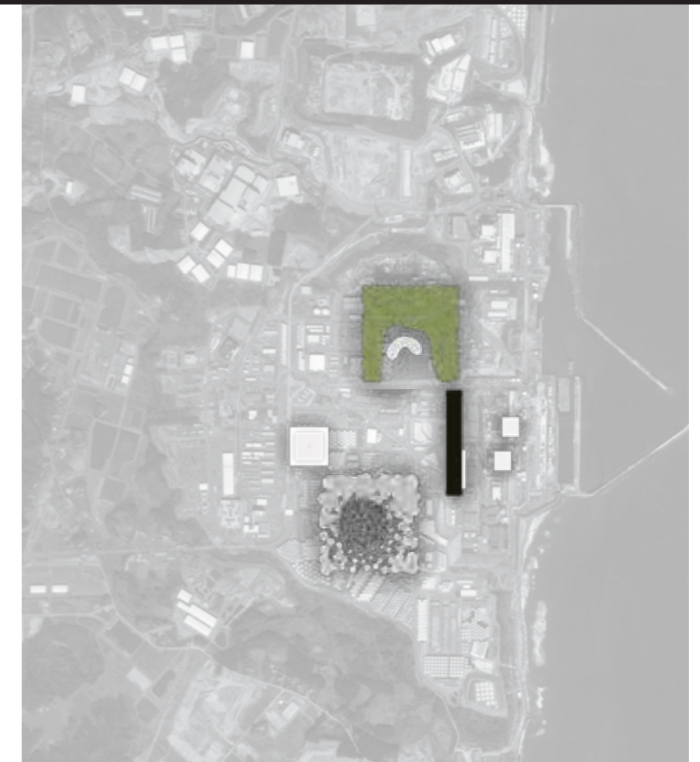
廃炉作業が完了し、福島第一原発跡地はついに再活用できる土地になった。

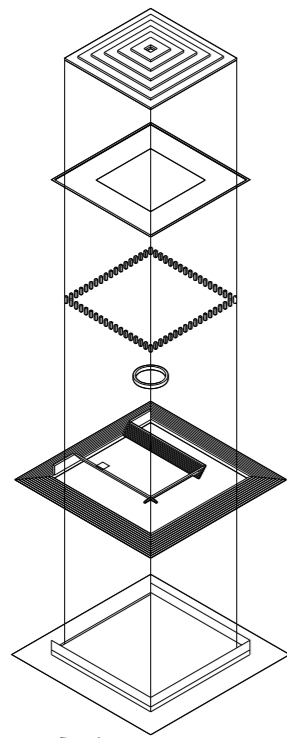
原子炉建屋は嚴重に管理がされており、中には立ち入ることができない。

原子炉は聖域化された。

2121 年の人々が事故の記憶を継承するため、原子炉と海を望む展望橋と祈りの間を設計する。

タンクの森は高台としての機能を失い、木々が生い茂る。

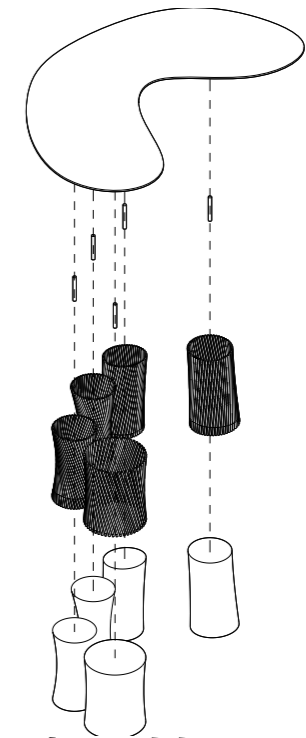




祈りの間

展望橋の軸に沿って敷地中央に設計。
トップライトや柱館から漏れ入る光が、中央の水盤を照らす。
水面を照らす光は揺らぎ、訪れる人に安らぎを与える。

廃棄物処理のために森林伐採された場所に、森の記憶を呼び起こす。直径 10m の神木にもした柱を立てた。屋根を曲面アルミにし、重厚な柱との対比を表現した。自然に向き合うための神殿空間。



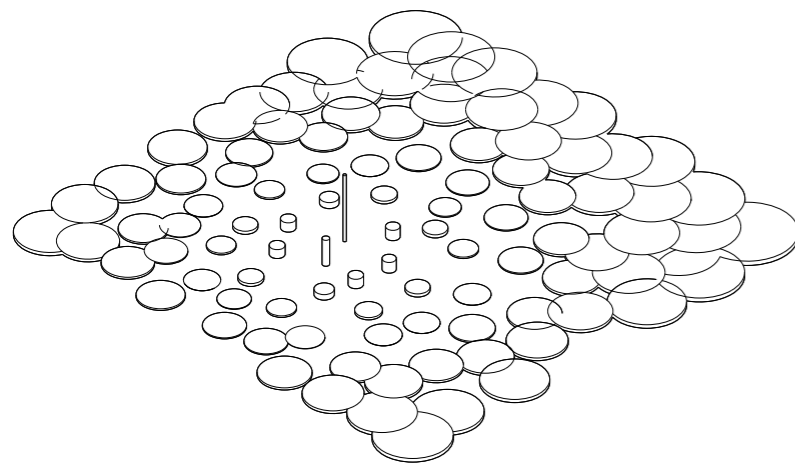
森の神殿

フクシマ的设计手法



この場所の記憶を読み解き、福島ならではの空間提案を行う。

タンクの森



原子炉が見える高台として使われるが、やがてその機能を失い、自然と混ざり合いながら朽ちやがて森になる。円柱空間がどこまでも続く光景は不気味な気持ちにさせる。大きさも高さも違う円柱は、広場になったり、内部空間になったり、多様な空間構成がなされる。

原子炉建屋と海を見渡せる展望スペースを設計。細長い空間を展示壁で区切り、様々な開口を開く。はじめは微かな光だが、奥に行くにつれ開口が海に向かって開き壮大な自然とその自然によって破壊された原子炉建屋を望む。切り抜かれたこの風景を見て自然への向き合い方について考える。

展望橋

